



アメリカ追従ではなく、独自外交を

ウクライナでの戦火は長引き、出口はまったく見えない。これに加えてイスラエルがガザに侵攻し、空爆等によってたくさんの方々の犠牲を出しながらも、国際的な停戦圧力は効果を発揮できずにいる。兵器が進化し、国家間の関係が複雑化するほどに、戦争は長期化・泥沼化し、世界戦争へと拡大していく可能性を膨らませている▼たまたま人類学者・中沢新一と元京大総長で霊長類学者の山極寿一の対談集『未来のルーシー〜人間は動物にも植物にもなれる〜』（青土社）を読んでいる。そこで山極は“Nature”への掲載論文The phylogenetic roots of human lethal violence(2016)を紹介するかたちで、種内暴力によって死亡した割合が、哺乳類から霊長類になると跳ねあがり、類人猿で下がって、ホモ・サピエンスになると旧石器時代までは続き、新石器時代、特に3000年前以降、鉄器時代になると急激に跳ね上がる。「要するに、文化・文明が暴力性を高めた」と述べている。ところが自然物を抽象化しシンボル化し、現実ではないものを伝達したり作り出していく過程である「認知革命」は既に旧石器時代に発生していたとする▼これを受けて中沢は、暴力とも直結する人間の脳の中で爆発的な増殖活動を行う意味増殖のエネルギーは、宗教と芸術のかたちで処理されていた。それが農業と都市が開始されることによつて、その宗教と芸術が根本的に変わり、暴力⇨戦争の増加をもたらすことになったとしている▼ここでは農業が発生し都市化する前の宗教は自然信仰的なものであり、変化した宗教は一神教を指しているように受け止められる。自然信仰をベースにする神道や、自然信仰の影響を受けた仏教を宗教とする日本人は、自らの意識構造を再確認してみることが必須だ。今の時代だからこそ日本は大きな役割を期待されているのかもしれない。

(土着菌)